
紫陽花

立花友香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花

【Nコード】

N2731A

【作者名】

立花友香

【あらすじ】

六月の梅雨の頃。精神科医である主人公はある少女を担当することになる。その少女の謎と主人公の心の葛藤を描いた作品。

序章

その少女に初めて出会ったのは、六月の雨の日だった。

ぐったりとした空気の重さに、私は何となく気だるさを感じていた。

「先生は時間というものはどんなものだと思いますか？」

少女は初めての診察でその様な質問をした。

「うーん、そうだな、真っ直ぐにすすんでいくもの、戻ることができないもの、かな？」

確か私はそう答えたと思う。

「戻ることができないもの・・・ですか」

「いや、言葉のあやだけだね。過去に戻ることはできないから」

「そうですか」

僕の答えを聞いた少女はどこか寂しげであった。

早く真実に気付くべきであったのだ。

しかし、気が付いたところで、いったい私に何ができたというのか。

あの少女はこれで救われたのであろうか・・・

序章（後書き）

『紫陽花 序章』をお読み頂き、ありがとうございます。
十六章＋序章&終章、合計十八回連載となります。

お付き合いよろしくお願い致します。 05・11・2 立花
友香

第一章 第二章

第一章

新崎県立病院は緑に囲まれた静かな市外地に建っている。

私が勤務する精神科第二は三棟に別れた病棟のうち、この病院の主となる第一病棟に属している。

院内は明るく、開放的なイメージで、患者にとっても私のような医師たちにとっても過ごしやすい環境だ。

回診を済ませ、内科第三の前の廊下を歩いていたら、廊下の向こうで内科医の波瀬に手招きをされた。

「何だ、珍しいな。患者はどうした？」

「空きができてな。小澤君。僕の患者を一人診て貰えないか？」

彼は面長で品の良い顔をしているのだが、ぼさぼさの頭と分厚い眼鏡のせいでその良さが失われてしまっている。よれよれの白衣もその原因の一つだ。

「意外だな、お前が患者をまわしてくるなんて」

「いや、この患者は小澤君の方が専門だと思ってるな」

「専門？子供なのか？」

「ああ、11歳の子だ。だが、年齢じゃあない」

「11歳だが自分を45歳の妻子持ちだと思ってるのか？」

「いいや、そうではない。まあ、一度診てみてくれ」

波瀬がここまで言うので承諾を試みた。

これがあの少女と出会うきっかけになった経緯だった。

第二章

波瀬に頼まれた少女の名は、遠藤望。年は波瀬の言ったとおりの1

1歳。

大きな目に、丸っこい顔のせいで、実際の年より幼く見える。長いストレートの髪に星の形をしたバレッタをつけている。

「始めまして、望ちゃん」

「・・・始めまして」

「緊張してる？」

「はい。少し」

診察室はやけに広い。そこにスチール製の机と椅子が三つ。

広さの割には物が少ないので、少々落ち着かない部屋だ。窓も一つしかない。

「そうだね。なんたって僕とは初めてお話をするからね。じゃあ、始めは絵を描くことにしよう。」

そう言って白い画用紙を取り出す。

「この紙に実のなる木を描いてくれるかな？どんなものでもいいから」

「はい」

そう答えてから彼女は少し考える様子を見せて、それから鉛筆を走らせる。

じっくりと考えながら描いているようだ。

「出来上がった？」

「はい」

「どれどれ？」

描きあがったものは、右上の部分に太くがっしりとした幹があり、右端に寄せたために幹の割には葉が少なくなった、実のなっていないものだった。

「実は忘れちゃったのかな？」

「いいえ、これからなるんです」

「どんな実がなるのかな？」

「オレンジ色の小さな実がなります」

少し、気になる絵だった。

木になる実のイメージが出来ているのであれば、この少女の年頃の子なら描くのが殆どだ。

それに、右上にはみ出した木のイメージは生への損失である。

木は自分自身を例えているものなのである。

「いつ頃なるの？」

「来年には」

「そう」

カルテに今のやり取りを書き留めていると、唐突に少女は言った。

「先生は時間というものはどんなものだと思いますか？」

第一章 第二章（後書き）

第一章の文字数が600字を満たさなかった為、第二章と併せて投稿をしました。申し訳ありません。

第三章 第四章

第三章

朝の院内の食堂。

昨日の雨も止み、院内は朝のさらりとした活気と慌しさに混み合っている。

「あの子はどうだった？」

朝食のトレイを机に置くと、さつそく波瀬が状況を聞きに来た。

「緊張はしていたけど、受け答えもしつかりできる子だったよ」

「そうか、何の話をしたんだ？」

「いつもどおりさ。まずお絵描きから始めた」

「あの子、年の割にはませたことを言っただけだったか？」

「ませたこと？別に。普通の11歳の女の子だったぞ？」

「そうか、と言って彼は朝食にかかり始めた。」

「そういえば、時間の話をしたよ」

その言葉に彼は思いのほか反応を示した。

「どんなだ？」

分厚い眼鏡越しにこちらを熱く見つめて問う。

「たいしたことは話してないぞ？時間とはどんなものなのだろうか、と聞かれただけだ」

「どう答えた？」

「ありきたりなことを。過去には戻れないと答えた」

彼はまだ何かを聞いたそうであったが、勤務開始の放送がかかったので、ここで話が一度途切れた。

別れしなに彼は僕にこんなことを言った。

「あの子の話を真に受けると、こっちがおかしくなるぞ」

その言葉の意味をすぐには理解できず、過ぎ去る背中にそれを尋ねようとすると、看護婦が彼に近付いてきて何かを話し、それからす

ぐに二人は慌てた様子で駆けて行ってしまった。

第四章

「最近によく眠れる?」

そう、城之崎純に尋ねる。

彼女は虚ろな目で私を見ている。いや、見ていないと言った方がよいのだろうか。

「薬を変えようと思うんだ。今までのものより少し強くなるよ」

返事が返ってくることはないと分かってはいるが、私はこの虚ろな少女に言葉をかける。

「前より眠気が増すと思うけどいいかな?」

彼女にはちゃんと聞こえているはずだ。ただそれに答えることができなただけなのだ。

この子はいったい心の中では何を思っているのだろうか?

言葉を返すことができないことに焦りを感じているのだろうか?

「じゃあ、きちんと薬を飲むんだよ。今日は久しぶりに晴れたから外にでも出てみたらどうだい?」

看護婦に連れられて去って行く少女の体は小枝のように細く、今にも折れてしまいそうであった。

この私に何ができるのであるのか?

薬で気長に治すしか方法がないことに歯痒さを感じ、そして、それが絶対ではないことに無力感を感じてしまう。

私は無力だ・・・

第三章 第四章（後書き）

一章一章の文字数が少ない作品で、二章で一部として投稿をしなければならぬ事になりました。計画性のない執筆、本当にごめんなさい。混乱を避ける為に、以降の投稿も全て二章づつとします。

第五章 第六章

第五章

遠藤望はいつも同じ服装で現れる。

白いフリルのついたブラウスに、黒のボックススカートといういでたちだ。

髪には必ず星のバレッタをつけている。

「こんにちは、今日の気分はどうだい？」

「まあまあ、です」

「夜はぐっすり眠れているかい？」

「あまり眠れません」

「そう、薬はきちんと飲んでるね？」

「・・・はい」

二回目の診察はこんなやり取りから始める。

まだ緊張をしているようだが、初回よりはほぐれた感じだ。

「君から何か話したいことはあるかい？」

そう尋ねると少女は下を向いて、話そうか話さないでおこうかと躊躇する仕草をして、それから私の方をちらりと見る。

「どんな事でもいいから話してごらん」

少女はもごもごと口の中で何かを言い、それから覚悟を決めたように、

「私は時間を好きなように行き来することができんです」と言った。

少々驚いたが、この手の話はよくあることだ。

ただ、この少女においては少し意外な気がした。

「へええ、それじゃあ君は未来が分かるのかい？」

「はい、だいたい。過去も分かります」

この子には妄想癖があるのだろうか？

自分には特別な力がある。そのため世間からは異常な目で見られてしまう、などと思っているのだろうか。
私にはこの少女は正常に見える。少々神経質なところが気にはなるが。

自覚症状は、重度の不眠、頭痛、吐き気、そして恐怖心。

この少女の恐怖心はどこから来るものなのであるうか。

大きな黒い瞳がこちらを見ている。

君はその瞳に何を映してそんなにも怯えているのか・・・

第六章

金曜の午後八時。

五日ぶりの我が家。

「お帰りなさい。いつもご苦労様です」

妻の治子が明るく出迎えてくれる。

「変わりはないか？」

「ぜんっぜん。そっちはどう？」

「いつもどおり、さ」

妻はデザイナーの仕事をしている。

この家の内装は彼女が手掛けた。白を基調として、すっきりとしたヨーロッパ風にまとめている。

私も彼女も我が家をお城のように思っている。私たちの楽園。

「今日はあなたが帰ってくる日だから、ごちそうを作ったのよ」

「うれしいな。僕の好物のシチューかな？」

「あったりい！」

彼女にはとても感謝をしている。

仕事の関係で家になかなか帰ることのできない私をいつも文句一つなく迎えてくれる。

「さみしくないか？」

そう尋ねると彼女はにっこり笑って、

「のんのんがいるから大丈夫」

と答える。

のんのんとは家で飼っているうさぎのことだ。

「そうか」

「うん。さあ、ご主人様お夕食にいたしましょう」

彼女はそう言って私の手を引いてゆく。

本当に彼女は寂しい思いをしていないのだろうか？

彼女一人だけの夕食はどんなのだろうか？

今の仕事を辞めれば、彼女だけなら、幸せにすることができるとは
ないだろうか。

あたたかい妻の手の温もりを感じながら、ふと、そんなことを考
えてしまった。

第七章 第八章

第七章

今日も雨だった。

バケツをひっくり返したような、とはこのことで、びしょ濡れになつて出勤をした。

「よう、今日はいちだんと降るなあ」

その声を掛けたのは同じ精神科第二で働く実藤だった。

「びしょびしょになつてしまいましたよ」

「今年はよう降るなあ」

「ですね」

確かに今年は雨降りが多い。

「なあ、お前、波瀬から患者をまわされたつて？」

「はい。一人だけ。でもいい子ですよ」

「遠藤つて子だろ」

「そうですね？」

「その子、内科ではちよつと有名だったらしいぞ」

「はあ？」

「ま、がんばれよ」

そう言つて意味ありげに笑い、彼は去つて行つた。

「・・・」

彼女が有名だった？ がんばれよ？ 私にはあの少女が手におえないよ
うな凶暴性のある患者には思えない。第一、少女の印象は消え入り
そうにおとなしい、だった。

あの子には何かがある？

一体何が？

とんでもない患者を引き取ってしまったのか？

あの少女については謎ばかりだ。

第八章

「こんにちは」

今回は少女の方から挨拶をしてくれた。

「こんにちは。気分が良さそうだね」

「はい」

「何かいいことでもあったのかい？」

「いいえ、とくには。ただ、私が先生の知り合いだったんですはて、この子と以前どこかで会ったことがあるのだろうか。」

「知り合い？僕は君と会ったことがあるのかな？」

「いいえ、今の私とはありません」

「そう」

妄想？からかい？判断がつきかねる。

「質問をいくつかさせてもらおうよ」

はい、と素直に返事をし、少女は姿勢を正した。

「君は誰もいない所で誰かの声を聞いたりしたことはあるかい？」

「はい。私自身の声を聞きます」

「私自身とは心の声のことかな？」

「意識の声です。あまりにも多くて潰れてしまいそうです」

「では、誰かの視線が気になることは？誰もいない所で」

「それはないです」

「自分の中に誰かがいるような感じはするかい？」

「私の意識の外には沢山います」

「その人たちが話しかけてくるのかい？」

「はい。そうです」

「君も話をするの？」

「私の声は皆には聞こえません」

「そう」

比喩で答えているのだろうか？自分の心の中の声を擬人化させているのか？

冗談を言っているようには見えないが・・・

少女の丸く大きな目を覗き込みながら、聞いてみる。

「君はこの状況をなんとかしたい、と思っているのかい？」

「はい。でも原因は私自身にあるんです。」

「ほう、その原因とは？」

下を向いたり左右をきよきよろとしてから、真っ直ぐに私を見据えて少女は言った。

「先生、私をこの時間から解放して、そして私たちを助けて！」

第九章 第十章

第九章

「おい、起きてるか？」

仮眠室でつかの間の休息をとっていたら、波瀬にそう問われた。

「ああ、波瀬君か、なんだい？」

寝台のカーテンを開く。

「あの子・・・望に何を話したんだ？」

「何も。どうしてだ？」

「あの子が口を聴かなくなった」

「いつから？」

「おまえの診察がすんで1時間程してからだ。あの子にパトナムをしたのか？」

パトナムとはパトナムの論文方式、DIDD（多重人格障害）の症状があるかどうかを調べるためのいくつかの質問のことである。

「ああ、したが？」

「結果は？」

「どう判断していいものやら。狂言ではなさそうだが、反応がありすぎる」

「DIDDの可能性は？」

「まずないだろう視線をまったく感じていないらしい」

「そうか」

そう言っただけ彼は腕を組んで考えだした。

「日にちをおいてまたパトナムをしてくれ」

「DIDDだと思うのか？」

「いや、その逆だ。俺はあの子の証言を疑っている」

「私には真実を語っているように感じたが？」

そう、あの少女は質問にしっかりと答えていた。あれは嘘や狂言で

はない。

「そろそろ仕事に戻る。あの子の部屋は161だ」

望はこの病院の小児科入院病棟に入院をしている。

「ああ、これから行ってみるよ」

「行ったら、あの子の言葉に注意を払ってみてくれ」

「言葉に？」

「そつだ。狂言かどうかを見極めろ」

そう言つてすぐに彼は部屋を後にしてしまった。

言葉に注意をする？

確かに望の発言には癖がある。

しかし、私の目を見てはつきりと話す口調は、それが真実であるように思われる。

波瀬はいつたい何を疑っているというのだ？

第十章

望の部屋に向かいながら妻のことを考えていた。

昔、彼女には自殺癖があつた。

彼女はそのことについて悩み、友人に相談をした。

その友人が彼女に私を紹介したことが、出会いのきっかけとなった。

私は彼女を患者としてではなく、友人として診てあげた。

それが彼女には必要であつたからだ。信じることのできる人間というものが。

そのセッションは三年程つづき、私たちの仲は深まっていた。

そうして彼女は精神の安定を得ることができた。

だが、それは長くは続かないであろう。

いや、正確に言つと、もう崩れかけていると言えるだろう。

彼女に落ち着きがなくなってきたのだ。

仕事に区切りをつけて、しばらく彼女に付き添うべきであろうか。

区切り？そんなものはこの職業には無い。

治子・・・・・・・・

私はお前をも直すことのできないだめな医者だ。
力が欲しい。

確実な力が・・・・・・・・

第十一章 第十二章

第十一章

望のベッドは五人部屋の窓際で、その窓からは病院のすぐ裏の森が見渡せる。

「望ちゃん、気分が悪くなったのかい？」

少女は膝を抱えて小さくなり、じっとしていた。

目を大きく見開いて、何かを凝視している。

「僕の声が聞こえるかい？」

ぴくり、と反応があつた。

それから突然、少女の双方の見開かれた目から涙が溢れた。

「先生！小澤先生、お願い、私を解放させて……！そうしないと私がまた可哀そう……ああ、先生の奥さんが死んでしまう……！」

そう叫んで私にしがみ付いてきた。

私を解放させる？私がまた可哀そう？

私の妻が死んでしまうとは……？

これが波瀬の言う狂言なのだろうか。この子は演技をしているのであろうか？

人にかまって欲しいから？

遠藤望という人格を皆に示したいから？

……境界性人格障害？

私には判断ができない。

少女は私の腕の中で小刻みに震えていた。

第十二章

時刻はもう四時頃であろうか。

あんなに激しかった雨も止み、夕方のさらりとした風が感じられてきた。

そろそろ今日の外来受診の準備をしなければならぬ時刻だ。

「どうだい、少しは落ち着いたかい？」

望はあれから三十分程私にしがみ付いたまま震えていた。

「・・・はい」

真っ赤な目で申し訳なさそうに私を見る。

「そう、よかった。訳を教えてくださいかい？」

「・・・はい」

ブラウスの袖で涙を拭いながら話し始める。

「私は、私という意識を別の時間へ連れて行って、それをその時間の軸に置いてくることができます。」

「ふむ」

「飛ばされた私の意識は、その別の時間で、それぞれ自身の固体を形作っていきます。要するに、今とは違う生き方をした異なる私ができるいくのです。マスターである私は、その私の分身から情報を聞き出すことができます。だから未来や過去を知ることができます。彼女たちが意識的に情報を送るのではなく、私が自動的に情報を入力していきます。この情報が入ってくるのは不定期です。彼女たちの記憶にはつきりと刻まれるような大きな出来事が主です。彼女たちは自分自身が私の分身であるとは知りません」

淡々と、しかし、しつかりと私を見据え、少女は語る。

「マスターである私が存在することで、彼女たちには何らかの大きな障害が出ているはずですよ。例えば、私の一人は大病を抱えています。もう一人の私は尽きることの無い悲しみを、そしてまた他の私は生きることに希望を見出せていません」

「君から彼女たちへ情報を送ることはできるのかい？」

「いいえ、それはできません」

「そう」

冗談を言っているのではなさそうだ。

妄想？そうとしか言えないであろう。

「それで、君はそのことについての何に悩んでいるんだい？」

「私にはもう、情報を処理しきれません。それと、私の中の一人に危機が迫っています。」

「それは、私の妻のことなのかい？何か彼女に起こるということかい？」

「・・・はい。大きな衝撃です。奥さんは今、心を病んでいます」

「はっはっは、君の方が僕たち医者よりも人の心が良く分かるようだね。妻には会ったことがあるのかな？大丈夫、彼女なら元気だよ。そう言いながら、私は冷や汗を感じていた。」

この子のはったりを言っているのだ。そう考えるしかないだろう。だが、何故かそうは思えない。

「妻に望ちゃんが君のことを心配していたよ、と伝えておくよ。元気になったようだね。じゃあ僕はもう行くよ。今日は疲れただろうから、早めに眠りなさい」

逃げるようにそう言って、私は病室を去ろうとした。

「先生！治子さんを助けてあげて・・・！！」

悲鳴に近かった。病室にいる皆が振り返る。

だが、私には振り返ることが出来なかった

恐怖を感じていた。

この子はどうして妻の名を知っているのだ・・・？

第十三章

「いったいどこまで彼女の発言を信じていいものなのでしょうか？」
寝台のベッドに寝転んで、そう実藤に尋ねた。

スチール製の二段ベッドの下が私のベッドで、上が実藤の物だった。
「患者の発言は全て信じなければいけないものである」
頭の上からそう答えが返る。

「ですが、彼女の場合は・・・私は境界例ではないかとにらんでいるのです」

境界例、それはとても扱いにくい症状だ。

感情の不安定が目立ち、自殺をほのめかすような行動を頻繁にする。
人見知りが激しいかと思いきや、気に入った人物には強く依存をする。
一過性のストレスに関連した妄想観念が生じたり、解離性障害が現れる。

「境界例？分裂じゃないんか？」

「ええ、その可能性も考えましたが、そうではなさそうです」

「じゃあ、DIDD」

「それはないと思いますね」

「そうだろうな。とにかく、彼女の行動には注意が必要ってことだな」

「今日も不思議なことがありました」

「なんだ？」

実藤が寝返りを打ったため、ぎしり、とスチール製のベッドが軋んだ。

「私の妻の名を知っていました」

「その子エスパーなんじゃあないか？」

「茶化さないで下さい」

「いや、その可能性だってあるぞ」

実藤はベッドから降りて、私の顔が見える位置にある椅子に座った。

「この仕事続けていると、本当にいろんな人物に出会うぞ」

「はい、あの、彼女が内科で有名だったというのは？」

「ああ、それか。不思議な子だったからさ」

その先を期待したが、そのまま彼はすぐに椅子を離れ、窓の方へ行
つてしまった。

「今日は月が綺麗だぞ」

「そうですね、あんなに沢山雨が降っていたのに」

「まあ、少しずつ、だな」

「はい」

どうも話をそらされたような気がする。

「もう寝ていいか？」

「はい。ひよっとしてさっきもう寝てました？」

「いや、大丈夫だ。おやすみ」

「おやすみなさい」

それから私はなかなか寝付くことができなかった。

小児科でいったい何があったのであろうか？皆は何かを隠している。

一体何を？

頭の中で色んな疑問が浮かび上がる。

明日看護師に聞いてみよう。

そう思いながら私はいつの間にか眠りについていた。

第十三章（後書き）

パスワードを忘れて更新ができない状態が続いていました。ごめんなさい。

これからゆっくり更新していきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2731a/>

紫陽花

2010年12月11日04時35分発行